

『徒然草』の背景：日本人の感性と思想

純 丘 曜 彰

1326年、幕府内紛に後醍醐天皇は倒幕計画を再開。兼好は、かつて幕府金沢家に仕えていながら、出家して後醍醐に近い堀川家や二条家にも出入りしており、内通を疑われる立場にあった。当時、私度僧でも功績によって僧官になる道があり、兼好もまた二十代後半で出家して寄進幹旋や和歌名声でこの道をもくろむも、すでに僧籍は寄進貴族の子女に占められており、脱寺して庶民に布教する浄土教や、武装する僧兵、詐欺まがいの商売に手を出す私度僧くずれが増え、兼好もまた形ばかりの仏道に甘んじる無行で開き直る。しかし、四十代後半に、倒幕による命の危機を感じるに至って、是非無く諸縁務すべてを棄て去る禅宗的な再出家の思いを、自分自身のために書き始めた。

『徒然草』の執筆事情

官僧と私度聖

寺院デベロッパーの出現

世情不安と私度僧くずれ

逸楽のための出家

合理主義と無行仏道

本覚思想と摩訶止観

再出家のための『徒然草』

その後の兼好

キーワード：私度僧、本覚思想、摩訶止観、二重出家、後醍醐天皇

『徒然草』の執筆事情

本研究は、当初、古典として広く読み継がれている随想『徒然草』の作者である吉田兼好の仏門的・武士道的な死生観と真善美の関係を通じて、現代の我々の中に息づく日本人としての感性と思想を問い直すことを目的としていた。ところが、彼の生きた時代と彼の立場を合わせて考えるとき、その表層的で一般的な表現の背後に、もっと時事に即した裏の意味が隠されていたのではないかと、との疑念が湧いてきた。そうでなければ、彼がなぜ突然に筆を折り、これを文箱に封印してしまったのか、理解しがたい。

『徒然草』が知られるようになるのは、兼好の没後七〇年、南北朝時代になってからである。とくに、神道を根、仏教や儒教を花実枝葉とする反本地垂迹説を唱えて室町幕府に取り入ろうとする吉田神道の吉田兼俱が、同姓類名の吉田兼好を先祖の一門としたことによる。このことから、『徒然草』もまた、その後、太古より続いてきたとされる神道的な日本の自然人生観を根とし、これに仏教や儒教の理念を花実枝葉として飾ったもの、という前提で解釈されてきた。そして、『徒然草』から日本人の感性と思想を探ろうという本論の当初の目論見も、この解釈を出発点としていた。

しかるに、史料に基づく近年の小川剛生の実証的研究^{*1}によれば、吉田兼俱による兼好の位置づけは捏造であり、事実としての兼好は、鎌倉武士の縁者で、京都に移り、名目上の出家をしながら、荘園安堵のための「寄進」の仲介業をしていた、とされる。そして、『徒然草』についても、その書かれている内容はかなり幅広い年代のことを含むものの、その都度に書かれたわけではなく、むしろ短い期間に一気に書き上げられたらしい。

そのころ、鎌倉幕府の実権は、執権北条家の私的な内管領、長崎家が握っており、1326年3月13日、これを嫌って第14代執権北条高時は病気を理由に二四歳で出家。前年末に生まれたばかりの側室の赤子が名目だけ執権を継ぐはずだったが、これに正室外戚の安達家が反発し、高時の弟、泰家を推し、長崎家は、出家隠居しようとしていた北条金沢貞顕を引っ張り出して来て、16日、15代執権に就ける。それで、泰家の方が出家隠居したものの、貞顕暗殺を企てているとのウワサが立ち、就任わずか10日で、26日に貞顕は辞任隠居。結局、4月24日に北条家庶流赤橋守時が最後の第16代執権に。

一方、京でも、同26年4月、邦良親王が死去し、持明院統の量仁親王が立太子。先の正中の変（1324）の事前発覚でしばらくおとなしくしていた大覚寺統の後醍醐天皇（1288～天1318～39）は、ふたたび倒幕の準備を始める。後醍醐のめざすところは、幕府を排した親政であり、公地公民の律令制への復古である。しかるに、兼好は、名目上は世を離れた出家者とはいえ、実情は私有地、荘園の売買仲介で生活し、その拠って立つ人脈も、幕府側の北条金沢家を中心としており、その当主、金沢貞顕も幕府で失脚したとなると、もはや後ろ盾の無い危うい身の上だった。

もっとも、内大臣堀川家と金沢家との縁（堀川の未亡人が貞顕の子の仁和寺真乗院院主と同棲）で、兼好も堀川家に入出入りし、また、堀川具親が後醍醐に仕えていたこともあって、大覚寺統に付く和歌の二条家に近づき、その弟子の「四天王」のひとりとして、庶民への和歌の普及に努めてたりもしていた。しかし、貞顕の子、金沢貞将（さだゆき、1302～六南24～30～33）が先の正中の変で後醍醐のクーデタを叩き潰し、また、和歌の二条家も勢いを失っていったために、後醍醐の情勢のうわさを耳にすることができても、もはや身を守るにたるほどのツテではなかった。

このころ、兼好は四十代半ば。この1326年4月より後、彼はひそかに『徒然草』の断章

をおりおり書き貯め始める。しかし、30年、金沢貞将が六波羅別当を解かれ、関東に戻るころ、兼好は筆を折り、以後、約百年、その草稿の存在は人目から封じられてしまう。この数年間の『徒然草』執筆の動機は何だったのか。また、執筆まで彼は何をしていたのか。

官僧と私度聖

兼好(1283?~1358?)は、京にあって、1310年ころ、いったんは滝口武士かなにか、侍品(さむらいほん、せいぜい六位)になったものの、その後すぐ、二十代後半で出家し、比叡山延暦寺に学んだとされる。延暦寺は東塔(とうどう)、西塔(さいとう)、横川(よかわ)の三境内からなり、いま、その横川境内の元三(がんさん、良源(912~85))大師堂の前には、兼好が横川で出家し、居住し、執筆した、と説明する看板が立てられている。

だが、その根拠とされているのは、『徒然草』238段の、この元三大師堂(竜華院)への言及。それも、原文では「人あまた伴ひて三塔巡礼の事はべりしに」とされ、その際、堂僧も知らなかった堂額の揮毫者を自分が判じてみせたという自慢話。これを素直に読むなら、堂僧は延暦寺の案内係だが、兼好は大勢で巡礼に訪れた観光客であって、その対比にこそ自慢の重点がある以上、むしろ兼好はこの訪問以前には延暦寺とはまったく縁がなかった(堂額について伝承などを知りうる立場になかった)、と理解すべきだろう。となると、二十代後半の兼好の出家というのは、何だったのか。ほんとうに彼は延暦寺に学んだことがあるのだろうか。

本来、正規の僧侶、「官僧」になるには、師僧の「得度」を得て、戒律と法名を頂き、戒壇のある大寺院道場に入山して「受戒」に臨み、衆徒として「修行」の後、「伝法」に至る。延暦寺の場合、修行は、顕教の前行、密教の加行からなり、その厳しさのゆえに、かつては三年以上を要し、多くが脱落した。だが、戒壇出の正規僧侶「官僧」となれば、それは天皇勅許身分であり、免税などの多くの特権があった。

しかし、奈良時代からすでに、個人で勝手に出家してしまう「私度(しど)僧」が続出。そのほとんどが脱税目的で、律令はこれを厳しく禁じていた。とはいえ、もとより官僧の新規定員があまりに少なすぎ(本来は年10人のみ!)、その後の仏教隆盛、寺院増大の実情に合わせるため、能力ある私度僧を試験によって官僧として追認するようになる。たとえば、第二代天台座主の円澄(772~837)は、私度僧出である。

ところで、最初に仏教を取り入れようとしたのが、もともと朝廷ではなく、六世紀の奥河内(現富田林付近)の蘇我氏であったように、七世紀においても、この地域には仏教を信奉する在家の人々「知識」が多く、私財や労役をもって自分たちで柏原に知識寺(現太

平寺付近)を建てた。同地出の行基(668~749)も、奈良の大官大寺(現大安寺付近)で官僧となったが、あえて地元に戻り、「知識」たちと協力して川に橋を架けるなどの事業を行う。

平安中期に登場した空也(903~72)も、鎮護国家四天王信仰の尾張国分寺でとりあえずの出家の後、在俗のまま諸国を遊行し、「念仏」として、庶民をも極楽浄土に往生せしめるといふ阿弥陀仏の名号を唱えながら、橋を架け、寺を造り、庶民の帰依を集める。その上で948年になってようやく延暦寺で受戒。

ところが、この追認の抜け穴によって、平安時代になると、貴族たちが自費で子女に寺社を新規建立させ、その功績をもって面倒な修行抜きに子女を官僧にして、その寺領に名目上の寄進を行うことで脱税する方法が横行。既存大寺院にも、修行しない俗物貴族子女の「学侶」たちが大量に入り込み、妻帯世襲も公然と行われた。たとえば、金沢貞顕(1278~六南1302~07~六北11~14~執26~26~33)が六波羅探題別当(長官)として赴任すると、その庶子、顕助(けんじょ、1294~1330)を真言宗仁和寺真乘院院主としたが、この顕助は、年上の堀川具俊未亡人と同棲している。

上述のように、戒壇のある大寺院の正規のルートで官僧になるのは、かなり難しかった。かといって、試験で高成績を出すとか、寺院を自費で建立するとかして官僧として追認を受けるというのも容易ではない。そこで、下級の貴族や武士などは、とりあえず私度僧としてかってに出家したうえでまじめに布教勸進し、堂殿建立や廃坊復興などの功績によって官僧としての追認を受けようという在俗の「聖(ひじり)」たちも多く出て来る。ただし、彼ら自身、まともな教学修行の経験が無く、庶民向けの易行、口唱念仏を見よう見まねで広め、浄財を集めた。当然、寺院側も資金調達を代行してくれる彼らを歓迎し、真言宗の高野山ですら、念仏衆の彼らを多く受け入れた。

寺院デベロッパーの出現

重源(1121~1206)は、古い奈良平群(へぐり)の豪族を在所とし、刑部(ぎょうぶ)六位左衛門尉だったが、伏見の真言宗醍醐寺で源運に師事し、浄土宗の法然に学び、大峰、熊野、葛城などの奈良の修験道の山々で修行し、平家の日宋貿易に乗じて三度も宋に渡った、という。この際、寧波の阿育王寺の舍利殿勸進を請け負い、後白河法皇(1127~院67~92)の信認を得て、日本から木材を輸出している。というのも、当時、中国はもちろん日本でも建築ブームで、都市部の木材需要が爆発的に増大しており、近隣の山々のすべてがすでにハゲ山だったからである。そして彼は、これに続いて、1171年には博多誓願寺本尊の木材を調達した。

1179年、治承三年の政変(クーデタ)で、平清盛(1118~81)が親族の高倉上皇(1161

～81)を擁立して、後白河法皇を幽閉し、その院政を停止。これに対し、ずっと仲違いしてきたはずの叡山延暦寺・奈良興福寺・滋賀園城寺の武装衆徒が連合して、後白河法皇の奪還騒擾を計画。しかし、もとより延暦寺天台座主の明雲(1115～1184、徒然草146)は清盛と昵懇で、後白河本人も計画を清盛に通告。1180年、清盛は延暦寺以外の奈良興福寺・滋賀園城寺を焼き払って、それらの寺院領を没収。

おりしも高倉上皇が早々に崩御し、清盛は後白河の院政再開を認める。ここにおいて、重源は後白河に焼け落ちた東大寺再建を進言し、その大勧進職に任命され、その費用捻出のために周防一国が東大寺領として付与される。このため、重源は、多様な一流の職人を全国から集め、東大寺領周防に林道を切り拓くところから始めた。また、同じく下北面武士六位左衛門尉から出家した西行(1118～90)には、奥州や鎌倉からの勧進を委ねている。95年、大仏殿が完成し、重源は「大和尚(わじょう)」(最高僧位)を与えられた。

つまり、重源は、私度僧ですらなく、むしろもともと山々を飛び回っていた寺院出入りの材木業者だったようだ。そして、それが、俗物貴族のように自費で寺院を建てるのではなく、また、聖のように庶民に念仏を広めて小銭の浄財を集めるのでもなく、寺院建設を企画し、その資金として法皇や将軍クラスから国をまるごと寺領に寄進させ、建材調達や職人招集から施工管理、さらには完成法要までトータルに行う寺院デベロッパー、ないし、寺院ゼネコンになったらしい。

ところで、寺社の伽藍や境内は、無垢清浄を旨としたために、長年、無木無草、無流無池が基本だった。平安時代の貴族の邸宅、高床大庇の国風寝殿造も、広い南庭は臣下拝礼の場であって、本来、そこに池はありえなかった。しかし、浄土教の流行で阿弥陀堂が建てられるようになると、宇治平等院や鎌倉永福寺など、現世と来世を隔てるものとして池が人工的に堂の前に掘られるようになり、また、鎌倉時代になると、禅、とくに臨済宗の寺院において、深山幽谷での修養を模すべく、山水の作庭が行われ始める。幕府によって南宋から招かれた蘭溪道隆(1213～78)は、鎌倉に建長寺を開山し、ここに庭園を造っている。

兼好にわずかに先立つ夢窓疎石(1275～1351)は、京都建仁寺や鎌倉建長寺で禅を学び、来日した一山一寧(1247～来99～1317)にも見えたものの、法嗣とは認められなかった。そこで、1305年、三〇歳のとき、山梨の僻村に浄居寺をみずから開き、これを皮切りに各地に庭を成しては次々と別地に移り、後には後醍醐天皇に認められ、苔寺として有名な西芳寺(1339)、枯山水を大成させた新設の天龍寺(1345)も手がけることになる。

このように、夢窓疎石もまた、禅僧として以上に天才的な寺院デベロッパーだった。彼は、田畑にもならないような無価値の山中や川縁の辺鄙な土地を禅の修養に最適とばかりに手に入れ、ここに寺院と庭園を成すことで、付加価値を成し、これを高値で売り払って、次の開発資金とし、しだいに大きな仕事を手がけるようになっていった。

『徒然草』124段で兼好が賞賛している是法法師の経歴も興味深い。もとは天台僧ながら、浄土宗鎌倉光明寺の円道に師事し、天台宗京都青蓮院（しょうれんいん）門跡（もんぜき、皇族が住職の寺）や祇園社（延暦寺所属）の坊官となり、その福井や愛媛、丹波などに散らばる寺社領荘園の管理を代行して、その利得でみずからも広大な土地を買収し、地主として賃貸して財をなし、兼好とともに歌人としても活躍している。^{*2}

兼好もまた、出家直後に山科小野荘を購入している。しかし、ここが鴨長明隠捨の日野の隣村であることを考えれば、当初は彼自身がここに遷り住み、長明同様の隠捨生活をすゝる気だったのかもしれない。だが、この荘園も、1322年には、院政から隠居したばかりの後宇田上皇にゆかりのある龍翔寺に、買値より安く、売り寄進してしまい、本人は、在所六浦称名寺の本山、京都仁和寺の南東の池上村に住み、歌人として活躍し、交際を拓けるようになる。

兼好が私度僧であるにしても、聖として念仏布教や浄財集めをした形跡は無い。むしろ、金沢家や堀川家、二条家の広い人脈と交際を背景に、重源や是法法師などと同様、上層の貴族や武家の荘園の寄進を斡旋仲介し、いずれその功績によって、どこぞの官僧となることを望んでいたのだろう。実際、当時、貴族や武家は、全国各地に荘園を持っていたが、不在地主であるために、現地の豪族や農民との紛争が絶えず、子女を官僧とするために、また、現地の紛争を抑え込むために、寺社寄進がさかんに行われていた。

くわえて、『徒然草』には、第10段、11段、27段、32段、43段、104段、137段、177段、224段など、やたら庭の風情を論じる段が多い。建物の造作（33段など）や樹木の蘊蓄（139段など）を入れれば、さらに増える。また、第51段では、大井川の水を水車で引く話も出てくる。当時、写実的で名所図会を兼ねた『一遍上人絵伝』（1299）に見られるように、過剰な木材需要のせいで、ほとんどがハゲ山だった。^{*3}とくに京都市中は、戦乱や火災によって廃寺跡がひどく荒れていただろう。夢窓疎石を先達として、兼好もまた、是法法師のような寺領の転売や寄進の斡旋をするに当たり、作庭植樹によって付加価値を付けていたのかもしれない。

しかし、いずれにせよ、兼好の官僧になる思惑はうまく進まなかった。それどころか、公地公民への復古をもくろむ後醍醐の登場で、寄進荘園そのものが風前の灯火となった。「人間の営みあへる業を見るに、春の日に雪仏を作りて、そのために金銀珠玉の飾りを営み、堂を建てんとするに似たり。その構を待ちて、よく安置してんや。人の命ありと見るほども、下より消ゆること、雪のごとくなるうちに、営み待つこと、はなはだ多し。」という『徒然草』166段も、じつは、若き日に出家して、寄進仲介で功績を挙げ、どこかの官僧となろうとしていた彼自身の話で、人生の残りの少なさを思い、純粋な初心も融け消えてしまっていたことに気づいて嘆くかのようだ。

世情不安と私度僧くずれ

平安末期から鎌倉にかけて、安元大火（1177）、福原遷都と源平合戦、養和飢饉、元歴大地震（1180～85）と災厄が続く。『方丈記』（1212）や『発心集』『無明抄』で有名な鴨長明（1150～1216）は、京都下鴨神社の祢宜の子で、従五位下。和歌や管弦で名を成すも、実父を失い、親族に疎んじられて神職の道を断たれ、1205年ころに甲賀大岡寺で出家。その後もひたすら財を擦り減らし、東山、大原、ついには山科日野山中で、わずか方丈の居に暮らすことになる。

そもそも、官寺の仏教というのは、その密教法力で鎮護国家の加持祈祷をすること。具体的には雨乞い、疫病よけ、天災防除、反乱鎮圧、皇子安産、そしてときにはひそかに特定人物の呪詛など。しかし、このように災厄だらけとなると、ろくに教学も修行もしていない俗物貴族の子女官僧という実情もあいまって、密教の法力効能の信頼性が失われる。くわえて、日宋貿易の復活で、中国では土俗呪術的な密教など、とうに廃れ消えてしまっている事実も伝わる。

このような状況に失望し、延暦寺出の法然（1133～1212、浄土宗開祖）や栄西（1141～1215、臨済宗開祖）、親鸞（1173～1263、浄土真宗開祖）、道元（1200～53、曹洞宗開祖）、日蓮（1222～82、日蓮宗開祖）など、逆にあえて官僧身分を棄て野に下り、新宗派を興す者たちも出てくる。つまり、捨世脱寺の「二重出家」だ⁴。もともと念仏は、延暦寺密教（台密）の開祖、智顛（538～97）の「三大部」の一つ、『摩訶止観』第二卷、三昧修行法の九十日常行三昧を簡略易行化したものであり、彼らの運動は、官寺としておかしくなった日本天台宗の大乘としての証を、鎮護国家から衆生救済に戻す原点復帰でもあった。

一方、官寺では、名目ばかりの「学侶」となった俗物貴族子女はなにもせず、運営は、入山はしたものの正規僧侶になれないまま半端な身分に留め置かれた「衆徒」たち、貴族の荘園村から家族ごと動員された「行人」たちに委ねられた。もとより、伝統の南都（奈良）興福寺と後発の北嶺（叡山山門）延暦寺、さらにこれから分立した大津（滋賀寺門）園城（おんじょう）寺は不和で、つねづね武力衝突してきたが、子女を送り込んだ俗物貴族たちは衆徒を使って朝廷に強訴を仕掛け、また、衆徒たちはみずから、彼らから離反してできた鎌倉新宗派を攻撃。やがて武装はエスカレートして、仏教の教学も修行も抜きのごろつきのような「僧兵」が膨れ上がる。

また、俗物貴族子女の学侶は、寺領（実態は私的荘園）を有し、その利得を収めるのみで、管理は代官（地頭、坊官）に委ねた。また、その代官もおうおうに現地には住まず、地元民に管理徴税を任せた。この結果、恣意的な多重課税となり、農民たちが荘園村からいなくなる「逃散」が頻発。彼らは、いずれかの寺社に転がり込んで、自分たちで座を組み、派手に行動するようになる。

たとえば、第115段に「ぼろぼろ」と呼ばれる連中の話が出てくる。兼好によれば、世捨人のようだが我執深く、仏道者のようだが武闘論争ばかり。放逸乱暴だが、死を恐れず、少しも悩まないのが潔よく感じる、とされる。おそらく彼らこそが、荘園で頻発していた不在地主と現地領主の訴訟沙汰に介入し、口頭弁論で、ときには実力行使で解決を請け負った弁護士ヤクザの祖。もっとも、209段に見えるように、俗物貴族の不在地主に代わって彼らを雇って使っていたのが、売買前に複雑な権利関係をクリアにする不動産仲介業者の是法や兼好だったのだろうが。^{*5}

また、『普通唱道集』（1297）には、門付（かどづけ）の翁猿楽に触れられている。彼らは寺社の法事祭礼の盛り立て役でもあり、縁起や神異をわかりやすく演じて庶民に伝えた。さらに、このころ、寺社の縁起物や季節物を商う売僧（まいす、蓮葉商い）、薬草やその煎じ茶をふるまう一銭茶売り（野師、香具師）なども市中に現われる^{*6}。また、法事祭礼や市中街角でその場限りのインチキな手品や賭博を手がける者もいただろう。いずれも、かなりうさんくさく、仏道者のなりでも、実情は浮浪者や山賊、詐欺師に近い。

また、農村の中には結束して武装し、代官らの立ち入りを拒否する、それどころか山賊野盗化して、代官を襲撃することも起きてくる。兼好よりやや若い楠木正成（1294?～1336）も、そのひとりである。現地荘園と同様、既存寺院においても、その大半を占める昇格できない不平衆徒や荘園村からの動員行人たちは、名目身分だけの俗物貴族子女の「学侶」の支配に対して、公然と反抗するようになってくる。彼らは、一般の荘園からの逃散民も迎え入れて膨れ上がり、延暦寺だけで数千人になった。そして、この直後、後醍醐天皇は、この延暦寺の武装不平勢力に依拠して、倒幕を実行に移す。

逸 楽 の た め の 出 家

兼好の小野荘園が、長明の閑居した日野の隣村であったのだから、当然、長明の『方丈記』はよく知っていただろう。しかし、長明の場合、実父を失い、親族に疎んじられただけでなく、安元大火（1177）、福原遷都と源平合戦、養和飢饉、元暦大地震（1180～85）と、散々な時代に二十代を過ごし、その後の人生もまったくうまくいかず、五十になっていよいよ運の無さを思い知り、出家する。とはいえ、「もとより妻子無ければ、捨て難き縁もなし。身に官禄あらず。何につけてか、執を留めむ。」と、そもそも彼は、出家以前から出家も同然の身の上だった。

これに対し、兼好の場合、出家は人の人たるゆえん、とまでされる。「人と生まれたらん印には、いかにもして世を捨れんことこそ、あらまほしけれ。ひとへに貪ることを努めて、菩提に赴かざらんは、よろず畜類にかはる所あるまじや。」（58）と兼好は言う。だが、彼はまた、「山林に入りても餓を助け、嵐を防ぐ縁無くてはあられぬ業なれば、おのづから世を貪るに似たることも、たよりにふれば、などか無からん。」（58）（衣食住の

ため、貪るかのようなものであることも、場合によっては、なぜ無かろうか) と、生活のための利潤追求は、許容、というより当然だ、と肯定してしまう。

当然、「背ける甲斐無し」(世を捨てた意味が無い)と批判されるだろうことに対し、「さすがに一度道に入りて世を厭はん人、たとひ望ありとも、勢ある人の貪欲多きに似るべからず。紙の衾(ふすま)、麻の衣(ころも)、一鉢の設け、藜(あかざ)のあつもの、いくばくか人の費(つひえ)をなさん。求むる所は安く、その心、早く足りぬべし。」(58)(出家すれば、欲が減り、安上がりで、すぐ足りる)と反論している。

財の無い長明にせよ、財の有る兼好にせよ、奇妙なことに、どちらも出家ということに積極的で求道的な意味合いは無い。そして、すべてを失って止むをえない長明と違って、とくに兼好はみずからただ逸楽を求めている。その心情は、むしろ自由を求め、支配を嫌って逃散した農民たちに近いのではないか。

実際、兼好は言う、「国のため、君のために、止むことを得ずして為すべきこと多し。その余りの暇、幾ばくならず。」(123)(国家のため、主君のためにどうしてもしなければならないことは多い。だが、その余の暇は、どれほども無い。)
「げには、この世を儂なみ、かならず生死を出でんと思はんに、なにの興ありてか、朝夕、君に仕へ、家を顧みる営みのいさましからん。」(58)(この世は儂く、どうせ死ぬのに、なにがおもしろくて、毎日、君に仕え、家を整える気になどなろうか。)

兼好は、家族さえ嫌う。「妻といふものこそ、男の持つまじきものなれ。……子など出で来て、かしづき愛したる、心憂し。」(190)それどころか、人と係わることも厭う。「世に従へば、心、外の塵に奪はれて惑ひやすく、人に交はれば、言葉、よその聞きに随ひて、さながら心にあらず。ひとに戯れ、ものに争ひ、一度は恨み、一度は悦ぶ。そのこと、定まれることなし。分別、乱りに起こりて、得失、已む時なし。惑ひの上に酔へり。酔の中に夢をなす。走りて忙はしく、呆れて忘れたること、人みな、かくのごとし。」(75)

さらには、自分自身の生活のあれこれさえも、ムダだと言う。「一日のうちに、飲食・便利・睡眠・言語・行歩、止むことを得ずして、多くの時を失ふ。その余りの暇、幾ばくならぬうちに、無益のことを為し、無益のことを言ひ、無益のことを思惟して時を移すのみならず、日を消し、月を度りて、一生を送る、もつとも愚かなり。」(108)

つまり、兼好の出家は、その後になにか道を極めようなどというのではなく、ただ現状の束縛、生活の面倒から逃れるところに重点が置かれている。「名利に使はれて閑かなる暇無く一生を苦しむるこそ、愚かなれ。」(38)「世俗のことに携はりて生涯を暮らすは、下愚の人なり。」(151)「おおかた、よろずの仕業は止めて暇あるこそ、めやすく、あらまほしけれ。」(151)「紛るる方なく、ただひとりあるのみこそ、良けれ。いまだ誠の道を知らずとも、縁を離れて身を閑かにし、ことに与からずして心を安くせんこそ、

しばらく楽しぶとも言ひつべけれ。」 (75)

先に、生業を続けても出家者は欲が無い (58) と兼好は言っていたが、じつはこれも、仏道によって執着を断ちきったからではなく、その正体はむしろ逸楽欲にほかならない。「財多ければ、身を守るに貧し。害を買い、累を招く仲立ちなり。身の後には金をして北斗を支ふとも、人のためにぞ煩らるべき。……位高く、やんごとなきをしも、すぐれたる人とやは言うべき。愚かに拙き人も、家に生れ、時に合へば高き位に昇り、奢りを極むるもあり。いみじかりし賢人・聖人、自ら賤しき位に居り、時に合はずして已みぬる、また多し。ひとへに高き官・位を望むも、次に愚かなり。」 (38) つまり、財産も、地位も、面倒なだけ。そんなものは時の運。あえて求めて求めれば、かえって身を滅ぼすだけ。

合理主義と無行仏道

止むなく出家した長明が、自分の仏道について、「今、草庵を愛するも咎(とが)とす。閑寂に着するも障なるべし。いかが用なき楽しみを述べて、あたら時を過ぐさむ。」と言ひ、「汝、姿は聖にて、心は濁りに染めり。住みかは、すなはち、浄名居士(在俗大乘の大人)の跡を汚せりといへども、保つところは、わづかに周利槃特(掃除のみで法力を得た)が行ひにだに及ばず。」と自問するのに対して、兼好は、みずからを顧みるところ無く、富裕僧としての「出家」の日々の雑念を喜々として語る。

そもそも兼好は既存仏教を嫌っている。『徒然草』の冒頭から「法師ばかり羨ましからぬものはあらず。……勢ひ猛に罵りたるにつけて、いみじとは見えぬ、増賀聖⁷⁷の言ひけんやうに、名聞苦しく、仏の御教に違ふらんとぞ覚ゆる。」(1)と、腐す。実際、当時の大寺院の官僧は、僧位買いの俗物貴族子女か、さもなければ、自分の超自然的な密教法力をいまだに自信たっぷりに語るくわせもの。

よほど思うところがあつたのか、仁和寺の法師が鼎(かなへ)をかぶって抜けなくなった(53)とか、高野山の証空上人が堀に落ちて、すれちがった女とその馬引に暴言を吐いた(106)とか、遍昭寺の法師がひそかに雁を殺して喰おうとしていた(162)とか、聖海上人が出雲大社の逆さの狛犬を見て感涙に浸ったが、すぐ神官が来て、この子供のいたずらを直した(230)とか、兼好は寺や坊主の実名まで挙げて醜聞笑話をいくつも『徒然草』に載せている。

とはいえ、連中は、法力はともかく、むしろ世俗的な権力がある。彼らに抗つては、寄進斡旋などの自分の商売もままならない。だから、兼好は言う、「世に語り伝ふること…多くはみな虚言なり。……かくはいへど、仏神の奇特…さのみ信ぜざるべきにもあらず。これは、世俗の虚言をねんごろに信じたるも、をこがましく、「世もあらず」など言ふも詮無ければ、大方はまことしく遇ひて、かたへに信ぜず、また疑ひ嘲るべからず。」(73)

) (仏神の奇跡など、本気で信じるのもばかげているが、ありえないと言っても仕方ないので、本当のように扱って、信じもせず、疑いもしないのがよかろう。)

長明の時代、『発心集』のように、怪異譚は信心勸奨の根拠となりえた。しかし、その百年後の兼好の時代には、庶民はともかく、上の人々はもはや冷静な合理主義に変わっており、奇譚もやはり笑話になりはててしまっている。たとえば、奥山の法師が夜道で猫又なる化物に襲われたが、じつは主人の帰りを喜んだ飼犬が飛びついただけだった(89)とか、検非違使庁に牛が入り込んで長官の席に座ったの見て、皆が陰陽師を呼ぼうとしたが、長官の父の太政大臣は、牛も足があれば、どこにでも登る、と言って、そのまま牛を持ち主に返した(206)とか、亀山殿の予定地に土着の蛇塚があってどけられないと言うのに、大臣は、皇国の蛇が皇族に逆らうものか、と言って、塚を大井川に流した(207)とか。

このようであるから、兼好はもちろん多くの上の人々にとって、もはや大寺院官僧の語る密教法力など話にならなかった。しかし、このことはまた、浄土教が庶民に語る極楽来世の魅力も、もはや通用しないことを意味していた。たしかに兼好は「後の世のこと、心に忘れず、仏の道、疎からぬ、心にくし。」(4) (来世を思い、仏道に親しむのは好ましい。) 「是法法師は…学匠を立てず、ただ明暮、念仏して、安らかに世を過ぐすありさま、いとあらまほし。」(124)という。だが、兼好は、極楽往生を語る浄土教を本気で信じていたわけでもなさそうである。「(法然上人は)「疑ひながらも念仏すれば、往生す」とも言はれけり。」(39)

それどころか、兼好の言う仏道は、口唱念仏すらしない、さらに極端な易行である。「(尊き聖の言ひ置きけることによれば) 仏道を願ふといふは、別のことなし。暇ある身になりて、世のことを心にかけてぬを第一の道とす。」(98) 「心更に起らずとも、仏前にありて数珠を取り、経を取らば、怠るうちにも善行おのづから修せられ、散乱の心ながらも繩床に座せば、覚えずして禅定成るべし。」(157) 「山寺に牆き籠りて、仏に仕う奉るこそ、つれづれも無く、心の濁りも清まる心地すれ。」(17) ようするに、ただ何もしなければ、それがそのまま仏道成就に至るといふことらしい。

本覚思想と摩訶止観

じつは、この考え方は、『大乘起信論』(c550、中国の偽訳書?)に基づき、平安中期から日本天台宗の中枢で形成され、口伝されてきた「本覚(如来蔵)思想」と呼ばれるものと似ている^{*}。仏性論を突き詰めれば、「草木国土、悉皆成仏」となり、人もまた元より悟っている(「本覚」)、ただ悟っていることに気づきさえすれば仏になれる(「一念成仏」と言われ、迷いも悟りも一体、現世穢土も来世浄土も同一、とされる。そして、これは修養不要論ともなり、俗物貴族子女学侶の買位是認の根拠ともなった。

この本覚思想は、仏教以前のインドのウパニシャッド哲学における万物一体のアートマン信仰と輪廻に発する、とも言われるが、もとより仏教は輪廻解脱を説くものであり、また、中国でも死した魂は永遠の極楽か地獄かに行き去るものであって、本覚論の万物仏性の発想は、むしろ森羅万象が八百万（やおよろず）の神性を持つとする、国風、本邦独自の感性であろう。

だが、いずれにせよ、ほんとうに延暦寺で学んだのかどうかもあやしい兼好が、天台層口伝の本覚思想を知るに至るまで本格的に教学に励んだとも思えない。実際、兼好には本覚思想の基本文献となる『大乘起信論』に拠るところは見られず、そもそも兼好には、大乘の三聚浄戒の撰律儀（しょうりつぎ）戒、撰善法（しょうぜんぼう）戒、撰衆生（せつしゅじょう）のうち、止悪修善（108）はあっても、もっとも大乘らしい利他は無い。

くわえて、現世のみが絶対であるとして、これを肯定する本覚思想と違って、兼好は極楽や地獄を本気で信じていないにしても、すくなくとも方便として無常の死から逆算して現世を考えている。（「人はただ、無常の身に迫りぬることを心にひしと懸けて、束の間も忘るまじきなり。さらば、などかこの世の濁りも薄く、仏道を務むる心も、まめやかならざらん。」（49））

むしろ兼好は、仏道そのものについてはほとんど語らない『徒然草』にあつて、「生活・人事・技能・学問などの諸縁を止めよ」とこそ、『摩訶止観』にも侍れ。」（75）と、彼の拠って立つ仏典を珍しく明示しており、実際、この一節はたしかに同書第六章「方便」（方法論）の遠方便（外堀）の「一、具五縁」の「四、息諸縁務」（諸縁務を休む）に、「縁務有四。一、生活。二、人事（慶弔）。三、技能。四、学問。」（巻四下）としてある。

とくにこの「四、学問」の詳説では、「四、学問者、読誦、経論、問答、勝負、等、是也。領持記憶、心労志倦。言論往復、水濁珠昏。何仮更得修止観耶。此事、尚捨。況、前三務。」とされる。ここをもって、『摩訶止観』を講じた増賀に従い、兼好もまた既存仏教を「仏の御教に違ふらん」（1）と批判し、また、自分独自の無行こそ、真の仏道と解した。

このほか、75段の「世に従へば、心、外の塵に奪はれて惑ひやすく、人に交はれば、言葉、よその聞きに随ひて、さながら心にあらず。……分別、乱りに起こりて、得失、已む時なし。」が「經紀生方、触途紛糾。得一失一、喪道乱心。若勤營衆事、則随自意撰。」（巻四下）の意識であるなど、『摩訶止観』が『徒然草』の元ネタの一つであったことはまちがいない。^{*9}

『摩訶止観』は、中国天台宗開祖、智顛（ちぎ、537～597）の『法華玄義』『法華文句』と並ぶ「天台三大部」のひとつ。『法華玄義』は、『法華経』に基づいて仏教の多様な

教説を体系的に整理するもの。『法華文句』は、『法華経』の解説注釈。これらに対して、『摩訶止観』は、修養の方法を明らかにしたもの。それも、一念三千の観心から、次第（修養階梯）を排し、一悟円頓を得ようとする。摩訶はサンスクリット語（インド文語、梵語）の音写で、偉大な、という意味。止観は、物事の永遠不変の涅槃相に観じ入ること。いわゆる禅定。「禅（禅那）」は、もともと「ジャーナ」の音写で、「サマーディ」の音写の「三昧」とほぼ同義。これは、いわゆる修行の座禅ではなく、世界の中での心身のあり方の問題であるから、行住坐臥、日常のすべてで禅定は成り立つ。

この『摩訶止観』は、講述四言調の簡素な漢文ながら、重層の箇条書きだらけであるために、全体を知った上ででない部分も理解しがたい。また、五世紀に大流行した中国浄土教の影響を受け、阿弥陀仏の他力信仰も採り入れ、達磨によって伝わって広まり始めたばかりの禅宗の修養法も参考にしている。一方、日本天台宗は、国立戒壇設立の都合で鎮護国家の法力を語る密教「台密」を成し、実践方法論だったはずの『摩訶止観』の一悟円頓も、『大乘起信論』から発展した一元多様の形而上学的な華嚴哲学で理論体系論として解釈するようになる。

くわえて、教学修行の階梯を整えたせいで、むしろ智顛本来の一悟円頓を離れ、『摩訶止観』に基づく法華読誦と念仏口唱の懺悔修行が先となり、さらにその後、延暦寺離反僧たちによって念仏口唱が簡略化され、易行として庶民に流行するに至っては、あくまで他力依存よりも罪障滅浄を重視すべく、念仏（阿弥陀仏祈念）を排して光言（大日如来真言）の口唱を普及させようとした。ここにおいて、『摩訶止観』は、天台宗の根本經典のひとつつながり、宗内ではもはや脇に追いやられていた。^{*10}

たしかに『摩訶止観』は、本覚思想を拓く端緒となったものの、『摩訶止観』に基づく兼好は本覚思想だったのか。ただでさえ既存仏教を嫌っていた兼好にあって、このような日本天台宗内の流れも踏まえるなら、彼の無行は、本覚思想とは別のところから由来しているのではないか。また、『摩訶止観』についても、第六章「方便」（巻四上下）以外のところまで体系的に読み込んだようにも思えない。

しかし、『徒然草』の引用を見るに、実物が手元にあったらしい。実際、彼はこれを入力できる可能性があった。幕府があった鎌倉は、天然の要害ながら、七里ヶ浜で港が無く、三浦半島の反対側、金沢六浦港を要した。しかし、この一帯は京都真言宗仁和寺の寺領荘園であったため、北条氏は同荘園の地頭となり、ここに称名寺を建て、同地の支配を手に入れた。この北条金沢家に兼好の亡父が仕えていた。

このころ、南宋（1127～1279）が元に追われたこともあって、蘭溪道隆（1213～78）、無学祖元（1226～来79～86）、一山一寧（1247～来99～1317）が来日し、日本で鎌倉建長寺に住して以後、同寺は多くの亡命僧の受け入れ機関となっていた。また、中国は、元寇（1274, 81）の後、ヴェネツィア商人マルコ・ポーロ（1254～1324）の来訪滞在（1275～92）もあって、シルクロード貿易を回復、1294年、クビライの孫のテムル（ティムール、

1265～1307) が即位して、「パクス・モンゴリカ」と呼ばれる繁栄を謳歌していた。

ここにおいて、北条金沢氏は、称名寺とともに、1306年と07年、寺社造営料唐船で日元貿易を始めている。このころすでに金沢貞顕は六波羅探題別当として京におり、兼好が六浦称名寺との書状のやりとりを仲介している。『摩訶止観』がその後の南宋禅でも古典されていた以上、鎌倉を行き来した兼好は、天台宗延暦寺を通さずとも、中国僧のいる建長寺などで、もしくは、直接に日元貿易で、『摩訶止観』を手にして京に持ち帰ることができたのではないか。また、先に兼好が山川草木や居宅造作に深い関心を持ち、寄進仲介で重源などのように造堂造園の付加価値をつけていた可能性を論じたが、これも本覚思想の「草木国土、悉皆成仏」に基づくのではなく、むしろ夢窓疎石のような禅宗文化の体験に発するのではないか。

再出家のための『徒然草』

先に、鎌倉新仏教の指導者たちが、身分保証された官僧だったにもかかわらず、実情と行末に失望し、延暦寺を脱したことを「二重出家」と呼んだ。ぼろぼろや門付、売僧もまた、最初は念仏普及や浄財集めで功績を挙げて寺籍を得ることを望んで、私度僧としていずれかの寺院に身を寄せたのだろうが、その後の現実の苦闘の中で私度僧くずれに成り果てたのだろう。兼好においても、二十代後半の社会身分的な意味での「出家」と、四十代後半の『徒然草』執筆時の後悔決意とは、二つに分けて考えるべきではないか。この二つが混同されていることが、兼好をわかりにくくしているのではないか。

法皇に見られるように、当時、「出家」は、親族や身上のしがらみを断ち切るというのみで、実際は、俗世を離れて仏道に励むどころか、むしろ俗世の直中に留まり、僧籍の権威縁故をかさに着て、これまで以上に好き勝手の仕放題というありさま。兼好の場合も、登り調子の探題別当金沢貞顕に仕え、自分も正規に侍品（さむらいほん）に叙せられたとはいえ、硬直した権威縁故社会の鎌倉末期にあっては、そこで先が見えてしまった。「なにの興ありてか、朝夕、君に仕へ、家を顧みる営みのいさましからん。」（58）（なにがおもしろくて、毎日、君に仕え、家を整える気になどなろうか。）とは、このころの若者らしい心情を思い出してのものだろう。

しかるに、兼好は、私度僧として身分職責を勝手に捨てて「出家」したものの、先述のように、仏道らしい務めもせず、むしろ金沢家や堀川家、二条家などの名門に出入りして縁故を深め、寄進の斡旋や和歌の名声という功績によって正規の僧籍を得ようと奮闘すること、二十年。だが、すでに本覚思想のせいか、聖界もまた俗世同様、俗物貴族たちの支配するところとなっており、家柄の無い兼好の努力は実を結ぶことはなかった。それどころか、鎌倉倒幕と公地復古をめざす後醍醐の再起で、幕府につながる彼の縁故、荘園にかかわる彼の仕事も、かえって彼の命まで危うくするものと成り果てていた。

「人間の営みあへる業を見るに、春の日に雪仏を作りて、そのために金銀珠玉の飾りを営み、堂を建てんとするに似たり。その構を待ちて、よく安置してんや。人の命ありと見るほども、下より消ゆること、雪のごとくなるうちに、営み待つこと、はなはだ多し。」（166）は、まさに彼自身の後悔だろう。人生は残り少ない。それどころか、現実の政治情勢の急変は、その残り少ない命さえ脅かしている。

「人はただ、無常の身に迫りぬることを心にひしと掛けて、つかの間も忘るまじきなり。……「昔ありける聖は、人來りて自他の要ことをいふ時、答へて言はく、「今、火急のことありて、すでに朝夕に迫れり」とて、耳を塞ぎて念仏して、つひに往生を遂げけり」と、禪林の十因にはべり。」（49）「刹那覺えずといへども、これを運びてやまざれば、命を終ふる期、たちまちに至る。」（108）「もし人來りて、我が命、明日は必ず失はるべし、と告げ知らせたらんに、今日の暮るる間、何ことをか頼み、何ことをか営まん、我等が生ける今日の日、なんぞその時節に異ならん。」（108）

「病を受けて死門に臨む時、所願一事も成ぜず、言ふかひなくて、年月の懈怠を悔いて、この度、若し立ち直りて命を全くせば、夜を日に継ぎて、このこと、かのこと、怠らず成じてん、と、願ひを起すらめど、やがて重りぬれば、我にもあらず、取り乱して果てぬ。この類ひのみこそあらめ。」（241）「所願を成じて後、暇ありて道に向はんとせば、所願尽くべからず。如幻の生の中に、何ことをか為さん。すべて所願、みな妄想なり。所願心に來たらば、妄心迷乱すと知りて、一ことをも為すべからず。ただちによろずことを放下して道に向ふとき、障り無く、所作無くて、心身永く閑かなり。」（241）

『徒然草』を見るに、急いで出家するように勧めること、そこにかかなり切実な思いが伝わってくる。しかし、これが彼自身に向けられた言葉だとすると、ここでいう「出家」は、もはやたんに身分職責を捨て、自由気ままな立場になることではない。むしろ、自由気ままに名家を渡り歩き、和歌で名声を得て、寄進の上前で労無く暮らしてきた彼の二十年こそが、いま、しっぺ返しとなり、四十後半にもなって、人としてなんの実体も無く、それでいて、そのことが悪しき旧体制の象徴的存在のひとりとして標的とされようとしている。

これは心理的なだけの中年の危機だの、杞憂だのではない。六波羅探題別当金沢家に縁がありながら、後醍醐に近い堀川家や二条家に入入りしていれば、間者と疑われても仕方あるまいし、実際、世間話にすぎないにしても情勢を金沢家に通じていただろう。そして、1324年の正中の変では、事前に情報が漏れたせいで、後醍醐はクーデタに失敗しており、彼が政権を取れば、兼好のような間者と疑われる恨めしき連中を処罰処刑するのは当然。兼好が拠った金沢家も、その後、実際に、貞顕、貞将の親子ともども、1333年に鎌倉で一族討死自刃に追いやられている。

第四十一段に、木の上で競馬見物をしながら、うたた寝する法師の話がある。これを笑

う人々に、兼好は、死が目前にありながら見物などしている我々も似たようなもの、と言ったところ、人々は深く感心してくれた、と言う。これに兼好は、「人、木石にあらねば、時にとりて、ものに感ずることなきにあらず」と付している。この最後の一文は、世間の人々も、木や石ではないのだから、近く京で戦乱が起こり、それに巻き込まれて死ぬかもしれぬことをすでに察している、ということだろう。

ここにおいて、彼の無行仏道において、『徒然草』であらためて『摩訶止観』の息諸縁務を採り上げた(75)のも、たんに面倒を嫌い、逸楽を求める以上の意味合いを帯びてくる。二十代後半の出家においては、後の寺籍獲得に役に立つかどうかで諸縁務を選んだ。だが、本覚思想が現世一体全肯定とすれば、この時期の兼好は、むしろ死の側に身を置き、そこから現世をまるごと否定する。禅宗に見える雪峰のごとく、米も、砂も、すべて棄てる。というのも、縁があったがゆえに兼好が禍に引き込まれる、というだけでなく、兼好との縁が、これから起こるだろう禍に人々や物事を巻き込むことになるからだ。

その後の兼好

果たして、1331年、倒幕計画はこんども幕府に漏れてしまい、後醍醐は慌てて京を脱し、笠置(かさぎ)山へ逃れるも、落城し、隠岐へ流される。しかし、延暦寺や河内、播磨で地元武装集団が暴れ、後醍醐も島を出て挙兵。その討伐に向かったはずの足利尊氏が京都で六波羅探題を落とし、また、河内で楠木正成と戦っていた新田義貞が関東に戻って北条氏や金沢家を滅ぼす。

こうして、1333年、後醍醐の建武の新政が成るが、公地公民に勅許特例の私有を認める「個別安堵法」のせいで請願や訴訟が殺到し、混乱を極め、政務は停滞。倒幕に功績のあった武将たちに恩賞も出ない。これに呆れ、足利尊氏は、光明天皇を擁立して、室町幕府を開く。

このように、後醍醐の新政は、思ったようには進まず、兼好のような旧幕府内通者に対する追求追討もうやむやになった。この間、兼好は洛外に身を隠して、古典校訂書写などをして日を過ごし、やがて歌人としてまたあちこちに顔を出すようになって、名士として八十近くまで生きた。だが、この晩年にも、彼が本気で仏道に励んだようすなど、結局、無い。

*1 『兼好法師』, 2017.

*2 「是法法師と兼好法師」, 稲田利徳, 2003. 『兼好法師』, 小川剛生, 2017.

*3 『都名所図絵』(1780)だと、江戸期半ばになっても、比叡山にさえ、まばらにしか木が無い。

*4 参『鎌倉新仏教の誕生』, 松尾剛次, 1995.

*5 『徒然草』には、他に205段など、法律関係の段も多い。

*6 ただし、庶民が季節市で苗木を買って造庭園芸を嗜むようになるのは、江戸末期以降。

*7 917～1003、良源の弟子で天台僧ながら、奈良多武峰（とうのみね）草庵（談山神社）に居し、『摩訶止観』を講じた。

*8 「『発心集』『沙石集』『徒然草』と天台本覚思想」，辻本臣哉，2019. など。

*9 参「摩訶止観と徒然草」1, 3-6, 三崎義泉, 1996-2000. 「『徒然草』における〈対象〉と〈心〉の位相」，松本新輔，1996. 「徒然草における閑寂の境地」，曹景惠，2004. など。

*10 参『日本仏教史』，末木文美士，1996. など。